御馳走してもらったこともあった。その日は近所の人たちまで集まり、琵琶のようなものを夜遅くまで弾いてくれた。どの人もいい人ばかりだった。

しかし何といっても一番すばらしかったのは広大な自然だ。砂丘のふもとで泊まった時どこまでも連なる砂丘に心をときめかせ、大きな大地に感動した。夜になれば、星が空一面を覆い、時には流れ星が流れた。満月はまぶしいほどに輝いていた。

今このダムの上では、太陽がギラギラと照りつけている。ダムの下から流れ出たわずかな水が小さな池を作っていた。その先には、どこまでも草原が広がっていた・・・・。

（土山　貴弘）

月こそ私の宿

眠りにつく前が一番幸せな時間だったのは、これが初めてであった。

泥のように眠りたい・・・・。

遠征中の正念場であるワジと６００キロ航行のどちらにも補給部隊に回り、砂漠から離れたウルムチ市で日記帳に書いたのはこの九文字のみ。朝が来れば夜を待ち、夜が来れば朝を待つだけの数週間。

残りの１００キロ地点で再びパドルを手にした時、河の流れは既に無く、大の字に寝転んだ背中からその日の疲れが地面に沈んでいくのを感じながら私は幸せだった。この疲労感。

うっすら目を開けると太陽の生まれかわりが居た。ああ、どれだけ夢見続けてきただろう。できたてのガラス細工のように透明で、可憐なこの満月。どれだけ。ランボーが大熊星を宿とするなら、月こそ私の宿である。沈黙の木霊。銀色の丘。目を閉じても感じる凄い力で迫ってくるものは、河中の瀬で見た波の連続を一瞬にして凍結させたような砂のうねり達からの無言のメッセージなのか。あるいはリラックスしてフワリ浮かぶ月からのものなのか。

受身のまま薄明るい闇に包まれ夜の一部になるとアイデンティティが崩壊する。補給部隊なのか航行部隊なのか、学生か社会人か、日本人か中国人か、男か女か、人間か否か。だけどこれは幸福感なのだとそれだけ頭の隅でぼんやりと思い目を閉じる。

あと数日でゴール。いつも感じるはずの合宿終了後の解放感に浸る自分を想像し、ゾクゾクする程の楽しい時間はなかった。しかしこの日の月は虚脱感を埋め、子守歌を歌ってくれていた。静かに。静かに。

ああ、泥のように眠れる幸せ。眠りにつく前が一番幸せな時間だったのは、あれが最後であった。

（佐藤　慈子）

「ワジ」は苛酷だった

今回の遠征で自分自身の中で強烈に印象に残っているのは「ワジ」です。初めてワジという言葉を聞いた人は何のことかわからないと思いますが、川が涸れている部分のことを指して、こう呼びます。もちろんその箇所はカヌーで進むことができないので、徒歩で進まなければいけません。その距離１３５ｋｍ。日本では３００ｋｍを踏破する合宿を経験していたので、それほど苦にならないだろうとたかをくくっていました。しかし、やはり砂漠は苛酷です。日中の気温は４０度以上になり体力の消耗は想像以上でした。その上周囲の景色があまり変化しないのと、地図を広げてみても、自分たちがいったい現在どこをあるいているのかということがはっきりしないので、精神的に極めてつらい４日間を過ごしました。

しかしこのような苦労の反面、遠征の全行程の中で出会った人々と、交流している時には、疲れを忘れてしまいました。我々の持っているものの全てをめずらしいそうに澄んだ目で眺め、色々とウイグル語で話しかけてきます。もちろん言葉そのものは理解することができないのですが、お互いの身振りが十分に補ってくれました。このような辛い経験や地元の人々との親密な交流など、自分自身には、もう２度とないことでしょう。今回の経験は極めて貴重で幸運でした。

（山本　靖朗）

注）　以上の文は、91年11月29日関西大学広報課発行『関西大学通信 204号』に掲載されたものです。